# 「対話型鑑賞」を用いたまちづくりに関する研究

## ―「対話型鑑賞」でまちと人を育てる―

令和４年度市民まちづくり研究員　朝倉　拓郎

## はじめに

本研究のねらいは、市民まちづくり研究員の今年度のテーマである「歩きたくなる福岡のまちづくり～居心地良く、アートあふれる空間～」というテーマに対して、物や環境を整備する（アート作品の設置、景観やまち並みの整備等）というアプローチではなく、みずからまちの魅力を発見して、楽しみながらまちを「歩く人」を育成するというアプローチからまちづくりの方法を探究することにある。そして本稿では、その具体的な方法として、「対話型鑑賞」に着目する。

対話型鑑賞とは、美術作品を鑑賞する人の鑑賞力を高めるために開発されたプログラムであるが、近年では、美術教育の分野だけでなく、それ以外の分野（たとえば、ビジネス分野、医療・福祉分野等）でも応用が試みられている方法である(1)。対話型鑑賞の概要とまちづくりへの応用可能性については本論であらためて説明することとして、ここでは、なぜ物や環境面での整備というアプローチではなく、「歩く人」の育成というアプローチを重視するのかという理由について述べておきたい。

第一に、せっかく物や環境を整備しても、それに気づき、そこから居心地の良さを感じることのできる鑑賞力のある市民が一定程度存在しなければ、その効果は限定的なものにとどまってしまうということである。われわれは、日常生活の中で目の前の仕事や利害に直接関係する情報に関心を集中し、それ以外のことはなかなか目に入ってこない。また、アートは特別な時間に特別な空間で（たとえば休日に美術館で）鑑賞するものと思い込んでいる人が多いため、日常的な時間や場所におけるアートの存在に気づきにくくなる。逆に、鑑賞力のある市民の数を増やすことができれば、物や環境を整備することによって得られる効果は何倍にも増大することが期待される。さらに、鑑賞力のある市民たちは、すでにある環境の中から新しい魅力を見い出し、みずから居心地の良い空間を作りだしていくこともできるであろう。

第二に、多様なアートを楽しめる懐の深い鑑賞力を持った市民を育成することによって、アートがまちに根づき、真の意味でアートによるまちづくりが可能になるということである。アートの中には、アーティストが新しい表現に挑戦したり、作品の中に社会的なメッセージを託したりすることによって、一般的には分かりにくい作品や、人によっては不快と感じる作品も存在し、それが原因でトラブルが生じる場合もある(2)。しかし、そのようなトラブルを恐れて挑戦的な作品を避けていけば、分かりやすい無難な作品ばかりが並ぶ

ことになる。真の意味でアートがまちに根づくためには、寛容で懐の深い鑑賞力を持った市民を育成することが不可欠であると考える。

上述の観点から本稿の目的をより具体的に設定すれば、第一に、対話型鑑賞は、アートによるまちづくりを担う、鑑賞力の高い寛容な市民を育成するための有効な方法であることを示すこと、第二に、対話型鑑賞をまちづくりの中に活かしていく方法を提案すること、の二点になる。以下、次の順序で議論を進めていく。まず「**１　対話型鑑賞の概要**」では、対話型鑑賞についての概要を説明し、それが美術鑑賞だけでなく、まちづくりにも応用できる可能性を有してることを示す。「**２　対話型鑑賞の効果の検証**」では、ワークショップを実施して、対話型鑑賞が鑑賞力が高く寛容な市民を育成するための有効な方法であることを検証する。「**３　対話型鑑賞を用いた取り組みの提案**」では、ワークショップの結果をふまえた上で、対話型鑑賞を用いたまちづくりの取り組みについての実践的な提言を行いたい。

## １　対話型鑑賞の概要

### （１）対話型鑑賞の成立と日本への導入

現在、日本において「対話型鑑賞」とよばれている鑑賞教育プログラムの原型は、一般的には、1980 年代後半に、ニューヨーク近代美術館（MoMA）の教育部長であったフィリップ・ヤノウィンが、認知心理学者のアビゲイル・ハウゼンと協力して開発したヴィジュアル・シンキング・カリキュラム（Visual Thinking Curriculum: VTC）であると言われている。その後ヤノウィンは独立して、VTC を発展させたヴィジュアル・シンキング・ストラテジー（Visual Thinking Strategies: VTS）を開発した(3)。

当時、MoMA でインターンをしていた福のり子は、そこで VTC/VTS に出会い、帰国後の 1993 年に、日本の美術関係者を対象に VTC/VTS の研修を開催したことが、日本で対話型鑑賞が普及する大きなきっかけとなった。さらに、彼女は着任した京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）で、VTC/VTS を大学の授業に取り入れたアート・コミュニケーション・プロジェクト（Art Communication Project: ACOP／エイコップ）を開始して、対話型鑑賞のさらなる普及を進めた(4)。現在では、美術館・博物館や学校の美術教育において、対話型鑑賞プログラムは一定程度日本でも普及していると言える(5)（以後、本稿では「対話型鑑賞」を、VTC/VTS に基づいた鑑賞教育プログラムの意味で用いる(6)）。

対話型鑑賞は、ハウゼンが提唱した「美的発達の 5 段階説」にもとづいている。それによれば、人間の美的鑑賞能力は、以下の 5 つの段階を経て成長していく(7)。

第 1 段階：説明（Accountive）

主観的で、自分の好き嫌いによって作品を見る。

第 2 段階：構築（Constructive）

主観性を抑制しようとするが、自分の価値観が優先し、それと合わないと抵抗感をもつ。
第 3 段階：分類（Classifying）
美術に関する知識を重視する。客観的な思考に執着し、直接的な反応、主観性を欠如。
第 4 段階：解釈（Interpretive）
作品に関する知識をふまえた上で、自分の感性を加えて解釈ができる。
第 5 段階：再創造（Re-creative）
作品と対話するかのような深い思索ができる。

ハウゼンによれば、美術館に来る人のほとんどは、第 1～2 段階にある。VTC/VTS はその段階にある人の鑑賞力を、より上の段階に成長させるためのプログラムとして設計された。それでは、対話型鑑賞ではどのようなやり方で鑑賞者の鑑賞力を高めていくのであろうか。次に、対話型鑑賞の具体的な内容について説明する[8]。

## （２）対話型鑑賞の内容

一般的に、対話型鑑賞は、１人のファシリテーター（進行役、ナビゲーターともよばれる）と 5 人程度の参加者でグループを作り、ファシリテーターの指示のもと、全員で一つの作品を鑑賞する形で実施される。一般的には、以下のような手順で進行する。
(1) まずは各人が一人で作品を鑑賞
(2) グループで対話しながら鑑賞
(3) まとめ（あえてまとめない場合もある）
対話型鑑賞の特徴の一つは、ファシリテーターが参加者に対して鑑賞を促す問いかけを行い、参加者の鑑賞を深めていくことである。ファシリテーターは主として以下の三つの質問を、参加者に適宜投げかけていく。

①（作品の中で）何が起こっているでしょう？
「何が描かれていますか？」のように作品の視覚的要素だけを描写させる質問に比べて、作品の意味内容についても考えることを促す。
②作品のどこからそう思いましたか？
自分の考えを作品に基づいて説明させることで、さらなる観察や論理的な思考が促される。
③もっと発見はありますか？
作品の一部だけに偏った解釈や限られた観点からの解釈に固執しないで、見落としや他の解釈の可能性を探求し続けることを促す。

ファシリテーターは、参加者が作品について発言しているときに、作品のどの部分について話しているのかを参加者全員と共有するために作品の該当する部分を指し示す（ポインティング）。また、参加者の発言をより的確な表現に言いかえたり（パラフレーズ）、

複数の発言の中から関連したものを結びつけたり（コネクト）して、参加者の考えを整理していく。さらに、参加者が情報を活用できると判断した場合には、ファシリテーターは参加者に作品についての情報を適宜提供する（インフォメーション）[9]。こうして対話型鑑賞の参加者は、ファシリテーターの進行の元、他の参加者との対話を通じて作品をより深く味わっていく。参加者の間で一つの方向に感想がまとまっていくこともあれば、多様な感想や広がっていくこともある。

**写真①：対話型鑑賞の様子（筆者撮影）**

## （３）対話型鑑賞の効果

前項で述べたように、対話型鑑賞は、鑑賞者の鑑賞力を高める目的で開発されたプログラムであるが、VTC/VTS を開発したヤノウィンとハウゼンは、ニューヨーク市の小学校と連携して対話型鑑賞を用いた授業を行い、その効果を検証した。その結果、対話型鑑賞の授業を受けた子どもたちは、観察力、言語力、論理的思考力において大きく成長したことが明らかになった。

また、ヤノウィンやハウゼンは、対話型鑑賞によって向上したヴィジュアル・リテラシー（絵や写真、図表、動画などの視覚的な情報を読み解き、それを発信する能力）が、他の教科の学習にも転移して、子どもたちの学力の向上に寄与すると主張し、対話型鑑賞の授業を受けた子どもたちが、標準テスト（アメリカの州あるいは全土で実施される統一的な学力測定テスト）において好成績をあげていることを示す調査結果を紹介している[10]。

さらに、対話型鑑賞の授業を実施した教師は、子どもたちは対話型鑑賞を通じてたんに学力が向上しただけでなく、市民として成熟していったと報告している。ある教師は次のように述べている。「対話や傾聴によって､児童たちは､いかに成熟した市民になるかを学んでいます。児童たちが友達や私に対して、そして自らの学習に対しても寛容で柔軟になっていくのが分かります。クラスの中で真のコミュニティが構築されていくのです」[11]。

このように参加者の市民的成熟を促進していく対話型鑑賞は、まちづくりの手法としても応用可能ではないかという指摘がある。たとえば、福のり子は、対話型鑑賞の醍醐味は参加者の間で「集合知」を作り上げていくことにあると述べ、対話型鑑賞によって得られ

る能力、すなわち「対象物を深く観察して読み解く観察力と論理的思考力、多様な観点から感想や意見を出し合い、気づきを深めていくコミュニケーション能力は、これからの時代を生き抜く人材に欠かせない力」であると主張する[12]。

また、愛媛県美術館の学芸員で、美術館の内外で対話型鑑賞の普及に努める鈴木有紀は、東京・六本木や愛媛県・伊方町などの地域で開催された対話型鑑賞プログラムを紹介した上で、次のように述べる。「対話型鑑賞（授業）では、だれもが対等な立場で、フラットな関係で学び合います。この特性を活かせれば、世代の差や立場の違いを超えて、さまざまな課題について、ともに対話することが可能になるのではないでしょうか。それは地域づくりのように多様な利害関係者がいる問題への取り組みにも活かせるかもしれません。立場の違いが邪魔をして十分な取り組みがなされてこなかった社会の課題や、異なる意見が対立してきたような問題にも、フラットな関係での対話は状況打開の手がかりになるかもしれません」[13]。

## ２　対話型鑑賞の効果の検証

前節では、対話型鑑賞の概要について説明し、対話型鑑賞がたんに芸術作品の鑑賞力の向上だけでなく、参加者の市民的成熟を促し、まちづくりへの応用可能性があることを示唆してきた。しかし、筆者が調べた限りでは、対話型鑑賞が参加者の市民的成熟に対してどの程度効果があるのかについての実証的な研究は見つからなかった。そこで本節では、小規模ではあるがワークショップを実施し、対話型鑑賞が市民的成熟の促進に与える効果を実証的に検証することを試みる。以下、本節では、（1）実施するワークショップの概要、（2）ワークショップの結果、（3）ワークショップの結果から得られた対話型鑑賞の効果の検証、の順で説明していく。

### （1）ワークショップの概要

#### ①ワークショップで検証したい仮説

上述の市民的成熟の内容は、本稿の「**はじめに**」で提示した観点から捉え直せば、アートによるまちづくりを担うことができる市民がもっている高い鑑賞力と寛容さと言い換えることができる。したがって、本稿で実施するワークショップによって検証したい仮説とは、「対話型鑑賞は、鑑賞力の高い寛容な市民を育成するための有効な方法である」ということになる。ここでワークショップの実施方法について説明する前に、本稿で想定している「鑑賞力の高い市民」、「寛容な市民」とは、どのような資質を備えた市民なのかということについて、確認しておきたい。

まず、「鑑賞力の高い市民」にとって必要な資質とは、アートに対する鋭い観察力を持つだけでなく、その魅力や価値を言葉で表現できることを指している。これによって、彼らはまちに存在するアートに気づき、その魅力を言葉で表現することで他の市民に伝えたり、議論することができる。

次に、「寛容な市民」とって必要な資質とは、多様なものの見方に対して開かれているということを指している。ただし、このことは、「すべての見方を肯定的に受け容れる」ということを意味しているわけではない。そうではなく、自分とは異なった嗜好や価値観（場合によっては自分が嫌いなものも含めて）を、直ちに否定したり排除したりせず、自分の見方をいったん留保した上で、他の見方の魅力や可能性を探ってみようとする態度を意味している[14]。このような意味での寛容で懐の深い鑑賞力を備えた市民が存在することによって、表面的に分かりやすいアートだけでなく、多様な魅力やメッセージをもったアートがまちに奥行きを与え、真の意味でアートが根づいたまちが形成される。また、その中でアーティストたちが新しい表現に挑戦しやすい雰囲気が生まれ、それはまちの創造性や活力をさらに高めることにつながる。

**②ワークショップの実施方法**

本稿では、対話型鑑賞が上述の二つの資質を高める効果をもっているかどうかを検証するためのワークショップを実施するが、その手順は以下の通りである。

（1）まずワークショップ参加者を、対話型鑑賞を体験するグループと未体験のグループに分ける。

（2）対話型鑑賞体験グループは、事前に対話型鑑賞を 3 回体験してもらう。（1 回 15 分程度）鑑賞する作品は、具象的な作品から始め、次第に抽象的な作品にしていく。

（使用する作品）

1 回目：《風神像》（写真②）

2 回目：インカ・ショニバレ CBE《ウィンド・スカルプチャー（SG）Ⅱ》

3 回目：イヴ・クライン《人体測定（ANT157）》（写真③）

**写真②：《風神像》（福岡市美術館蔵）**

写真③：イヴ・クライン《人体測定（ANT157）》（福岡市美術館蔵）

（3）ワークショップを開催し、両方のグループが一つの同じ作品を鑑賞する。鑑賞する作品は、若干抽象的で、好き嫌いが分かれそうな作品とする。その後に、「ワークショップ調査票」（以後、「調査票」と表記）を記入してもらい、その結果を比較する。最後に、対話型鑑賞体験グループの参加者には「対話型鑑賞についてのアンケート」（以後、「アンケート」と表記）を記入してもらう。

（使用する作品）目［mé］《まさゆめ》（写真④）

写真④：目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル 13

なお、ワークショップの詳細な手順は、下記の通りである。

・まずはじっくり作品を観察、鑑賞してもらう。（5 分）
・調査票・項目①（作品の第一印象）、項目②（その理由）を記述（1 分）
・調査票・項目③（作品を見て気づいたこと、感じたこと）を記述（3 分）
・調査票・項目④（最終的な作品の評価）、項目⑤（その理由）を記述（1 分）
・鑑賞した作品についての簡単な説明（1 分）
・対話型鑑賞体験グループにアンケートを記入してもらう。（5 分）

「ワークショップ調査票」の様式

**ワークショップ調査票**

以下、ワークショップ実施者の指示に従って、回答してください。

①この作品の第一印象について、下記から選んでください。（該当番号に○）
1．とても気に入った。
2．まあまあ気に入った。
3．あまり気に入らない。
4．嫌いである。
5．とくに何も感じない。

②①の回答を選んだ理由を書いてください。（自由記述）

③この作品について気づいたこと、感じたことを書いてください。（自由記述）

④この作品についてどう評価するか、下記から選んでください。（該当番号に○）
1．とても興味深い作品である。
2．まあまあ興味深い作品である。
3．あまり興味深い作品ではない。
4．つまらない作品である。
5．とくに何も感じない。

⑤④の回答を選んだ理由を書いてください。（自由記述）

## ③仮説の検証方法

（1）作品に対する鑑賞力の検証

両グループの調査票③の記述（文字数）を比較して検証する。具体的には、対話型鑑賞体験グループの方が、記述量が多くなっているかを検証する。記述量が多いから直ちに鑑賞力が高まっているとは必ずしも言えないかもしれないが、しかし、作品についての記述量と鑑賞力との間には一定の相関関係があると考えられる[15]。

（2）多様性なものの見方に対する寛容さの検証

両グループの調査票①（第一印象）と④（最終的な評価）の結果を比較して検証する。具体的には、①で否定的な評価（3、4、5）をした人が、④でどの程度肯定的な評価（1、2）に変化したかを検証する。対話型鑑賞によってより寛容になるとすれば、対話型鑑賞体験グループの参加者は、対話型鑑賞未体験グループと比較して、自分の第一印象をいったん留保して多様な観点から作品を評価しようとすることで、否定的評価を肯定的評価に変える可能性がより高いと考えられる。

## （２）ワークショップの結果

【対話型鑑賞未体験グループ（以下、MG と表記）の結果】

| | | 項目③の平均記述文字数 |
|---|---|---|
| 作品について評価の変化なし（肯定的→肯定的） | ：13 名 | 28 字（総文字数 374 字） |
| 評価の変化なし（否定的→否定的） | ：11 名 | 21 字（240 字） |
| 作品について評価の変化あり（否定的→肯定的） | ：20 名 | 30 字（606 字） |
| 評価の変化あり（肯定的→否定的） | ：1 名 | 5 字（5 字） |
| グループ全体 | ：45 名 | 27 字（1,225 字） |

【対話型鑑賞体験グループ（以下、TG と表記）の結果】

| | | 項目③の平均記述文字数 |
|---|---|---|
| 作品について評価の変化なし（肯定的→肯定的） | ：1 名 | 77 字（総文字数 77 字） |
| 評価の変化なし（否定的→否定的） | ：1 名 | 73 字（73 字） |
| 作品について評価の変化あり（否定的→肯定的） | ：9 名 | 62 字（560 字） |
| 評価の変化あり（肯定的→否定的） | ：0 名 | |
| グループ全体 | ：11 名 | 64 字（710 字） |

TG で、「否定的→肯定的」に評価を変えた人の最終的な評価の理由：

・なぜ、このようなプロジェクトを行おうと思ったのかという興味。ねらい、目的、理由、成果、テーマなどが気になる。

・何を表現したいのかが自分には見当がつかなかったので、制作者の意図が気になる。

・絵画や彫刻ではなく､バルーンにしたことの意味を知りたいと思ったから。

・個人としてはあまり好きではないが、違和感や奇妙さ（日常ではあまり覚えない）を体現・表現している部分は評価することができると考えたため。

・あまり好きではないけれども、なぜこういった作品を作ろうとしたのか、この人は誰なのかといった疑問や興味はでてきたため。

・どういった行程でつくっていったのかも気になる。

・人の顔をバルーンにするという発想、これが突然街中に現れた時の人々の反応が気にな

るから。
・あまり好きではないが、理由（この作品の意図や思い）が何であるか想像（予想）が難しいため、考えるのも楽しそうであるし、知るとまた違った見方ができるのではないかと思ったため。
・突然この作品が東京の空に浮かべたという意図がまったく伝わってこなかったため、とても興味深く感じられた。好きと興味深さは違うということがわかった。

【TG へのアンケートの結果】（回答者 8 名）
①対話型鑑賞を体験した感想
1　とても面白かった：5 名
2　まあまあ面白かった：2 名
3　あまり面白くなかった：1 名
4　つまらなかった：0 名
5　どちらでもない：0 名

②①の回答の理由（自由記述）
（面白かった理由）
・作品に自分とは異なる印象をもつ学生もおり、新たな（複数の）視点から作品を見ることができた。
・自分とは違った見方をたくさん知ることができて、関心の幅が広がったと感じたため。
・今まで、自分の中では絶対「こう見える」という一つの見方でしか考えられなかった作品が、違うものに見えるようになっておもしろかった。
・これまで体験した鑑賞活動と違って、他の人の考えも聞けたから。
・自分にはない見方や、そこから感じるストーリーを知ることができた。
・色、形からかなり異なるイメージをそれぞれ得ていることが知ることができたと共に、その内容が自分がまったく思いつかないもので新鮮だったため。
（面白くなかった理由）
・一人で作品を見る方が好き。

③対話型鑑賞を経験して、体験前と比べて自分の中に変化を感じたか。
1　大いに変わったと感じる：0 名
2　.少し変わったと感じる：7 名
3　あまり変わらない：1 名
4　まったく変わらない：0 名

④変わったと感じたこと（自由記述）

・自分の中の感想だけでなく周囲の視点を取り込みつつ､作品を眺めることができるようになった。
・少しだけ、「こういう見方をすることもできるのか」といった幅が広がり、物の見方・考え方にも幅が生まれたと思う。
・回を重ねるごとに芸術鑑賞に関して視野が広がり、視点が増えたように感じたから。
・他の見方はないかな？と考えるようになった。
・作品を見ることの視野が広がったように思える。

⑤また対話型鑑賞をやってみたいと思うか。
1　大いにやりたいと思う：4 名
2　まあまあやりたいと思う：3 名
3　あまりやりたいとは思わない：1 名
4　まったくやりたくない：0 名

### （３）対話型鑑賞の効果の検証

①作品に対する鑑賞力の比較

調査票の項目③（作品について気づいたことに関する自由記述）の文字数を比較すると、TG が平均 64 字に対し MG が平均 27 字となった。もし、記述文字数の多さが作品に対する観察力と関連しているとすると、TG は対話型鑑賞を通じて観察力を高めることができ、それによって作品の魅力（疑問も含めて）に気づきやすくなったことが推測できる。

②多様なものの見方に対する寛容さの比較

第一印象で否定的な評価をした者の中で、その後に評価が「否定→肯定」に変化した者の割合は、TG は 90％（10 人中 9 人）に対し、MG は 64％（31 人中 20 人）であった。「否定→肯定」への変化が、作品に対する否定的な第一印象をいったん留保して、ほかの見方や最初は気づかなかった作品の魅力を探ろうとした姿勢の結果であると解釈すると、TG は対話型鑑賞を通じて多様なものの見方に対する寛容さを広げていったと推測できる。

また、TG の中で「否定→肯定」に変化した者の理由の記述をみると、「作品を好きではないが、自分が気づかなかった魅力や作者の意図があるかもしれないから」というパターンの記述が多く見られた。これは、自分の評価を相対化してほかの評価の可能性に対してオープンであろうとする姿勢の現れとみることができる。このことからも、対話型鑑賞は参加者の寛容さを促進する効果を持っていると言えよう。

他方、MG について見ると、「否定→否定」のグループと「否定→肯定」のグループの間で調査票③での記述文字数を比較すると、前者が平均 21 字に対して後者は平均 30 字であった。ここでも記述文字数の多さが作品に対する観察力と関連していると考えると、「否定→肯定」のグループは高い観察力によって作品の魅力に気づき、それによって作品に対

する評価を肯定的に変えたということが推測するできる。その意味では、対話型鑑賞を体験しなかったとしても､作品をじっくり観察してそれを意識的に文字に記述するだけでも、寛容さの促進に一定の効果があることがうかがえる。

③TG へのアンケートから

まず、回答者 8 人中 7 人が対話型鑑賞を面白いと感じたこと、同様に 7 人が対話型鑑賞をまたやってみたいと回答したことから、対話型鑑賞には十分なエンターテイメント性があると言える。面白いと回答した理由については、自分にはなかった見方・考え方にふれることができたからという理由が多かった。また、やはり 7 名が対話型鑑賞を通じて、自分の視野や視点が広がったと感じている。これらのことから、対話型鑑賞が、異なったものの見方にふれることが楽しいと感じられるマインドを養い、参加者の寛容さを促進する効果があることがわかる。

## ３　対話型鑑賞を用いた取り組みの提案

以上、ワークショップの結果から、対話型鑑賞には参加者の鑑賞力を高め、寛容さを促進する効果があることが検証された。これをふまえて、対話型鑑賞を活用した具体的な試みについて、いくつかの提案を行いたい。

①知的なエンターテイメントとしての活用

前節で示したように、対話型鑑賞には十分なエンターテイメント性があり、準備にもそれほどコストがかからないので、継続的な開催が期待できる。「ビブリオバトル」（知的書評合戦）のようなキャッチーなネーミングがあれば、さらに普及するかもしれない。しかし現在のところ、対話型鑑賞が実施されている場としては、美術館で来館者向けのプログラムとして実施されるもの、学校で美術教育の一環として実施されるもの、美術愛好者がプライベートに実施するもの等、限られたものとなっている。

そこで、公民館やコミュニティセンターといった、より身近な公共施設において開催されている市民講座の一つとして対話型鑑賞を実施することを提案する｡鑑賞に使う作品は、実物がなくても美術館から借りた画像をプロジェクターで映写したものでも十分可能である。また、一部の美術館で実施されているように、オンラインで開催することによって、公共施設へのアクセスが悪い人や、何らかの理由で外出が困難な人にも対話型鑑賞を体験する機会を提供することができる。

同時に、対話型鑑賞のガイド役となるファシリテーターを育成していく必要がある。ファシリテーターには特段の専門知識はいらないが[16]、やはり一定のスキルと経験は必要である。美術館や美術系の教育機関の協力のもと、ファシリテーターの養成講座を定期的に開催していくことをあわせて提案したい。

②コミュニケーションの場としての活用

対話型鑑賞の醍醐味の一つは、他者との対話を通じて自分とは異なった見方や考え方にふれることにある。したがって、参加者の間で属性や価値観の違いが大きいほど、対話型鑑賞によって得られる面白さや気づきも大きくなることが期待される。そこで、外国人との対話型鑑賞を提案する。

筆者は、美術館のツアーで外国人と一緒に美術鑑賞した経験があるが、彼らは日本での評価や知名度に関係なく作品を楽しむので、日本人どうしではなかなか出てこない感想や意見を聞くことができて大変刺激的であった。また、伝統的な古美術の鑑賞では、中国、台湾、韓国の人たちとの間で共有できる感覚と微妙に違う感覚が見えてきて、これも新鮮な経験であった。

外国人との対話型鑑賞はそれ自体として楽しい体験であると同時に、「アジアの交流拠点都市」として成長することをめざしている福岡市にとっても、積極的に実施する価値があると考える。外国人との交流から様々な刺激やエネルギーを得る機会として、また福岡に暮らす外国人との相互理解を深める場としても、外国人との対話型鑑賞は効果的なツールになりうるであろう。

③まちづくりのツールとしての活用

作品に対する鑑賞力を高めることは、対話型鑑賞のもう一つの特徴であった。この特徴を活かして、まちづくりのツールとして対話型鑑賞を利用することを提案する。具体的には、「まち歩きツアー」と対話型鑑賞を組み合わせることで、それまで気づかなかったまちの魅力を再発見していくというものである。その際に、参加者の中に異なった世代の人を混ぜたり、古くから住んでいる人と新しく入ってきた人を混ぜたりすることによって、異なった観点からまちの魅力（場合によっては問題点も）を見つけあうことになる。それを通じて参加者がお互いの違いを認めつつ、まちに対する理解や愛着を共有することが期待され、このことはコミュニティの絆を強めることにもつながるであろう。

また、近年各地で開催されている地域芸術祭のようなイベントに対話型鑑賞を組み込むことも、対話型鑑賞の有効な使い方であろう。対話型鑑賞を通じて、地域の人々の間の交流の促進、地域の魅力の再発見などが期待される。

## おわりに

以上、本稿では、アートを用いたまちづくりに不可欠な、鑑賞力の高い寛容な市民の育成にとって対話型鑑賞が有効な方法であることを検証し、対話型鑑賞を用いたまちづくりの取り組みについての提案を行った。ここまでの議論をふまえて、まちづくり研究員の本年度のテーマである「歩きたくなる福岡のまちづくり～居心地良く、アートあふれる空間～」の実現に対して、対話型鑑賞がどのような貢献ができるかを最後に考察したい。

対話型鑑賞が、アートのあふれる居心地の良い空間を直接的に創出するということはな

い。しかし、対話型鑑賞によって育成された、鑑賞力が高く寛容な市民は、すでにまちにあるものの中から新たな魅力や可能性を発見することができる。また、豊かな多様性に開かれた奥行きのあるまちづくりに取り組むことができる。つまり、彼らは主体的、能動的に、まちを居心地の良い空間に変えていくポテンシャルを持っているのである。あと必要になるのは、彼らがまちを歩いて、そのようなポテンシャルを発揮する機会を増やしていくような仕掛けを工夫することである。そのためには、具体的にどのような工夫があるだろうか。それについては、本稿以降の諸論文が多彩で魅力的な提案を行っているので、そちらに譲りたいと思う。

**【謝辞】**

本稿に作品の写真の掲載を許可してくださった福岡市美術館と目［mé］の皆様、および本稿で実施したワークショップに協力してくださった大学生の皆様（九州産業大学、佐賀大学、北九州市立大学）に深く感謝いたします。

**【参考文献】**

以下、本稿中で参照した文献のみを掲載する。なお、文献の参照にあたっては、原則として「著者名、発行年、ページ数」の形式で参照箇所を示した。

上野行一：『風神雷神はなぜ笑っているのか―対話による鑑賞完全講座―』光村図書（2014）。

OECD 教育研究革新センター：『アートの教育学―革新型社会を拓く学びの技―』篠原康正、篠原真子、袈裟晶訳、明石書店（2016）。

杉林英彦：「審美眼的発達に基づくヴィジュアル・シンキング・カリキュラムに関する基礎的研究」、『美術研究』277 号、36-38 頁（1998）。

鈴木有紀：『教えない授業　美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方』英治出版（2019）。

ヤノウィン、フィリップ：『どこからそう思う？　学力をのばす美術鑑賞　ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』京都造形大学アートコミュニケーション研究センター訳、（2015）原著 2013 年。

森功次：「美術作品の教材化の功罪―「ビジネス×アート」における対話型鑑賞が取りこぼすもの―」、『美術手帖』2021 年 10 月号、70-73 頁。

山口周：『世界のエリートはなぜ美意識を鍛えるのか？―経営における「アート」と「サイエンス」―』光文社新書（2017）。

---

(1) 教育分野での応用については、鈴木（2019）を参照。ビジネス分野での応用については、山口（2017）を参照。具体的な事例としては、東京国立近代美術館では、ビジネスパーソン向けの対話型鑑賞プログラムを実施している。（https://www.momat.go.jp/am/learn/business/）また、昨年 12 月に福岡アジア美術館では、医療福祉従事者向けの対話型鑑賞ワークショップが開催された。『西日本新聞』2022 年 12 月 9 日。

(2)たとえば、あいちトリエンナーレ 2019 における「表現の不自由展」をめぐるトラブルなど。

(3)ヤノウィン（2015）32 頁、226 頁。

(4)エイコップでは、VTC/VTS を日本人向けに改良した鑑賞プログラムを作成し、大学の授業や研修で用いている。詳しくは、鈴木（2019）第 2 章を参照。

(5)筆者自身は、福岡市美術館におけるボランティア研修の中で、初めて対話型鑑賞を経験した。

(6)もっとも、「対話型鑑賞＝VTC/VTS」という見方に対しては異論もある。たとえば上野行一は、対話による美術鑑賞は、VTC/VTS が日本に紹介される以前から日本の学校教育の中で実施されてきた歴史があり、そこでは VTC/VTS とは明確に異なった理念や方法論が確立されていると主張する。上野（2014）第 4 章。

(7)ハウゼンの「美的発達の 5 段階説」の概要については、杉林（1998）を参照した。なお、ハウゼンの論考は、VTS のウェブページ（https://vtshome.org/）に収録されている。

(8)以下の説明は、主として、筆者が福岡市美術館のボランティア活動で体験した対話型鑑賞の内容に基づいている。

(9)対話型鑑賞において、ファシリテーターが参加者に対してどの程度情報を提供するべきかについては、場合によって異なっているようである。固定的なメンバーで、長時間、継続的に対話型鑑賞を実施する場合には、ファシリテーターが適宜情報を提供して、作品についての客観的な事実をふまえた高い鑑賞力を養うことが期待できる。それに対して、一時的なメンバーでその場限りの対話型鑑賞を実施する場合には、美術史的な知識がなくても気軽に楽しめるということを重視して、ファシリテーターの情報提供は控える傾向が強いように見える。このことに関して、森功次は、対話型鑑賞の普及によって、多くの人がアートを楽しむ機会が広がることについては賛意を示す一方で、表面的な感想だけを語り合うだけの安易な対話型鑑賞は、美術作品に対するより深い理解を妨げる危険があるとして注意を促している。森（2021）73 頁。なお、本稿第 2 節の中で筆者が実施した対話型鑑賞では、作品についての情報提供はほとんど行っていない。

(10)ヤノウィン（2015）62-63 頁。ただし、OECD 教育研究革新センターは、VTC/VTS のような視覚芸術教育を受けた子どもたちは、受けなかった子どもたちよりも一般的に学力が高いという相関関係は見られるが、因果関係を直接示すデータはないとして、その効果を限定的に評価している。OECD 教育研究革新センター（2016）179 頁。

(11)ヤノウィン（2015）57 頁。

(12)『朝日新聞』2022 年 8 月 23 日。

(13)鈴木（2019）238 頁。

(14)もともと西洋社会における「寛容（tolerance）」とは、すべてを肯定的に受け容れるという意味ではなく、「耐える・我慢する・許容する」（tolerate）という動詞から派生した言葉で、「みずからとは考えや信念、あるいは嗜好や習俗を異にする者あるいは集団」のような「異質な他者を排除もしくは迫害せず、その存在を尊重し、それとの共存を図る態度」を意味している。『岩波社会思想事典』（岩波書店、2008 年）、35 頁。

(15)美術鑑賞のスキルの一つとして、作品の視覚情報を言語情報に変換する「ディスクリプション」という技法がある。この技法は、作品について言語で記述することが鑑賞力を高めるという経験的知見に基づいていると考えられる。

(16)もちろん、美術史的な視点をふまえた、より高度な鑑賞力を養成することを目的に対話型鑑賞を実施する場合には、ファシリテーターには、相応の専門知識が求められる。前掲注（9）を参照。